

知的障害者表象の文学的研究—知的障害者や人間はいかに語り得るか

論文審査の結果の要旨

本論文は、明治の近代化以降、現代に至るまで、日本において知的障害者の文学的形象がどのようになされてきたかを、具体的に跡付けようとしたものである。

そもそも知的障害者は、近代的な諸制度の確立とともに、国家の発展を担うべき人間の組織からは疎外、排除される存在であった。そのため、文学研究において近代人の自我といった問題が中心に据えられた場合、そうした周縁的なものへの関心は自ずと薄いものにならざるを得なかった。しかし、現実問題として知的障害者を社会から排除することは不可能だったのであり、文学もそうした事情と無縁であるはずもなかった。本論文が着目したのは、まさにその点である。

明治 37 年に発表された国木田独歩「春の鳥」には、六蔵という「白痴」の少年が登場する。言葉も覚えぬ数の観念に欠けた六蔵は、英語と数学の教師である「私」にとって、教育を施すことのできない、即ち人間とは言い難い存在であった。その一方で自然に溶け込んだ六蔵の姿は、私をして「天使」と感ぜしめたりもする。六蔵は謎の死を遂げ、そのことによって、白痴ゆえに無垢であり、「自然の児」として束の間見せたその存在の輝きが、哀惜されることになる。

大正 6 年に発表された芥川龍之介「偷盗」では、美しい女頭領のもとに集う盗賊たちの人間群像が描かれるが、その中の一人に、「天性白痴に近い」とされる下衆女阿濃が含まれる。盗賊仲間からも「阿呆」呼ばわりされる阿濃が、「自分も母になれる」という喜びに満ちて、「一切の悪が、眼底を払って、消えてしまふ」ような夢を見る。そのような阿濃を、従来は悪を浄化し救済する無垢の母として位置付けようとしたが、本論文では白痴の女が母になるという点に注目し、作品発表当時、社会的に白痴者の恋愛や性、出産が忌避されていたことと照らし合わせて、疎外、排除の対象としてではない「白痴」への眼差しを持ち得たところに独自性を見る。

大正 15 年に発表された石井充「白痴」では、優秀な医学生であったにもかかわらず重い脳病により田舎に連れ戻され、百姓生活をするようになった主人公謙介が、家族の無理解に晒されながら無欲に農作業に打ち込む様子が描かれるが、そこにかえって純粋な人間の姿が見出されている。

平成 2 年に刊行された大江健三郎『静かな生活』では、従来のように健常者と知的障害者とを対立的に捉えるのではなく、そうした見方を無効化するような捉え方となる。平成 17 年に発表された青来有一「石」では、軽度の知的障害を持つ男の一人称の語りとして進行し、イディオ・サヴァンの記憶力を持つゆえに、辛い記憶が回帰して、その度に「石」になる主人公の姿が、被爆者やキリシタンの迫害と結び付けて描かれるところに、健常者／知的障害者という対立軸では覆えない問題が胚胎しているとする。イディオ・サヴァンに関連しては、昭和 30 年頃、山下清を天才画家として紹介した精神科医、式場隆三郎の知的障害者観について、特に一章を割いている。

本論文後半には、「知的障害に関する記述を含む作品・事項一覧」と題して、明治以降現在に至る膨大な情報が幅広く蒐集されており、今後さらに多くの作品に即した研究の推進が期待される。

以上のような観点から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。